

〈謝辞〉

本作の執筆にあたって、三文文士会所属の芋粥露青先生、及び水面先生から助言と資料提供協力を頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。

2020年9月9日 南風 こまち

〈前回までのあらすじ〉

霧降荘の事件から帰還した碓氷だったが、ついに彼女を過去の因縁が襲う。過去からやって来た男、笠原。獣は碓氷を喰い、そして、それに飽き足ることはなかった。

〈補足・注意事項〉

*本作品に掲載した全ての図において、無断転載を固く禁じます。

旅する女

南風 こまち

第七話 巡る因果が果てる時

必死に抵抗したのは、最初だけだった。

この獣に喰われゆくうちに、あの日々が。あの、石巻での暗い日々が、現実と重なり、交わり、私の意思を、精神をいたぶり、蝕んでいった。

「……ちっ」

いくら姦されてもうんともすんとも言わなくなった私にうんざりしたのか、笠原は力任せに私をぶん殴った。

口の中に血の味が広がり、何度も唾えさせられた生臭さと混じり合う。それでも私には、抵抗する気力が湧いてこなかった。

男と女、双方の肉がぶつかり合う音が、薄暗く、荒らされた私の部屋の中に響く。血と汗と精の、吐き気がするほどむき苦しい臭いのする部屋の中に響く。私の肉体が、この獣に体の一番奥深い所をこじ開けられる私の肉体の悲鳴が、ただ部屋を満たしていた。

なぜ今更この男が私の所にやってきたのか。それがさっぱり分からなかった。あの時の混乱、あの日のどさくさに紛れてこの男からは逃げおせた。はずだった。

獣が荒い息を吐く。木偶の坊となった私の体の中に、種を撒く。何度も何度も、熱くねばねばした液が撒かれ続ける。私はひどく涙んだ目で、それを諦めたように、いや、まるで他人事のように見ていた。あの日のように、死んでしまおうと思う気力さえ起きなかった。

「何だよ、もう終わりか？」

獣が私の髪を引っ張り、私の顔を自身の鼻先にぶら下げる。毛根が数本、地肌と泣き別れになるのが分かった。「おい、何とか言ってみたらどうなんだ。この人殺し」

人殺し。

……。

笠原はねちやりと蔑みの笑顔を向ける。少し長い黒髪に、黙っているだけなら美男子な顔。

「……けつ、つまらない女だ」

乱雑に私の体をフーリングの床に投げ捨て、獣は服を着る。一糸纏わぬ姿で横たわる私を、散々に捌られて血と痣と種まみれになった私を、まるでごみくずを見るかのような目でじろじろと眺める。

「相変わらずだんまりか。ええ？」

体が動かない。最初は恐怖で動かなかったものが、今は痛みと絶望で動かないのだ。

「じゃあ、これならどうだ」

いやらしい笑み。札付きの悪ガキが悪戯を思い付いたような、そんな笑み。抵抗できない相手をおもちゃにして楽しむ、悪辣な笑み。

私のスマホに手を伸ばす。どこで知ったのか、暗証番号をすらすらと打ち込み、中を見る。

ビンゴ、という呟きが獣の口から漏れた。立ち上がり、私の腹を力任せに踏みつけ、台所に向かう。

「お前は俺から井上を奪った。俺も、お前から奪ってやるよ」

そう言い捨てて、男は私を足蹴にしながら手にしたものを見せる。

包丁。

私の脳髓を雷撃のように悪い予感が、あの日の記憶が駆け巡る。

私から奪う……誰を？

……まさか。

「や……まさか……やめ……」

「黙れ」

笠原の足が、私の首筋をぎりぎり踏みつけ、氣道を潰す。

息ができない。

酸素を求めてもがくまでもなく、視界が暗黒に沈んでいく。

薄れゆく意識の中、私は最愛の人の名前を聞いた気がした。

* * *

年の瀬、2014年を目前に控えた居酒屋『かま田』は忘年会シーズンというかき入れ時を迎えててんやわんやだった。今日は団体予約が入っていないからまだマシだけど、それでも客が多い。

「全くなんてこった、確氷の野郎はまだかよ」

「先輩、遅いですね。遅刻ですか？」

あの人が遅刻するなんてあんまり想像できないけど。

「それが、何にも連絡がねえんだ。メッセージを送っても既読にならねえし、電話も不在。遅刻か欠勤かも分からない」

釜田さんが苛立たしげに説明してくれる。どうしたんだろう。仕事関係では堅物な先輩らしくない。お通し用のいぶりがっこを切り分けながらも、奇妙に感じた。

「今日は俺とお前だけで回すしかねえな。大和、悪いが今日はいつもよりきりきり働いてくれ」

「しようがないですね、了解です」

私は大きいため息をついた。今度先輩には埋め合わせとして何かおごってもらおう。

開店時間になりしばらくしてから、雪で凍てついた引き戸がカラカラと開いた。

「いらつしやいませー！ ……あれ、お姉ちゃん」

私の発した言葉に、釜田さんが怪訝そうに入り口の方を振り向く。

「いらつしやい！」

「叶、久しぶり。元気にしてた？」

カールさせた毛先から雪をはたき落としながら、お姉ちゃんが私の目の前のカウンター席に陣取る。

「まあ、ぼちぼちかな」

「おい、大和。お前、姉貴がいたのか」

釜田さんがお通しを出しながら小声で私に聞く。そういえば今夜、お姉ちゃんが店に来ることを話し忘れていた。

「申し遅れました。大和、雑誌記者をしています」

そう言いながら釜田さんに名刺を渡す。

『月刊サフィール』だあ？ ……知らねえな」

名刺を着流しの帯に挟み込む釜田さんをお姉ちゃんは苦笑いした。誰に対してもぞんざいな口のきき方をすると、事前に教えておいたけど、あまりにもその通りで面食らったのかもしれない。釜田さんも名刺を渡す。

「で、ご注文は？ 取材はお断りだ」

「出来の悪い妹の顔を見に来ただけなので、取材はしませんよ。とりあえず生を」

「あいよ。大和、生一丁！」

出来の悪い妹、と呼ばれたことに対するせめてもの反抗にお通しのいぶりがっこを増やしておいた。漬物の苦手なお姉ちゃんが僅かに顔を引きつらせるのを見て少し胸がすっとした。

「仕事でこっちに来たの？」

「うん。今度の3月にこっちで取材の仕事があるんだけど、その下見にね。鉄道模型メーカーの社長が建てたお屋敷らしいんだけど」

「でも、たかが雑誌の記事を一本書くためだけに下見なんてする？ わざわざ東京からこんな遠くまで」

「普通はしないけど、話を聞く限りだと随分妙なお屋敷らしくて……それに、こっちは別の仕事もあつてね」

明日、国交省の人に取材することになってるんだけど、今夜はその前合わせも兼ねてここで飲もうと思つて」

「国交省？」

もしかしてあの人かな？ そう考えていると、また入り口が開いた。

「いらつしやい！」

「いらつしやいませー！」

「どうも、ご無沙汰しちやつて」

私の思つた通り、霧島さんが肩の雪を払いながら店に入つてきた。

* * *

暗い。

暗い。

落ちていく。

ここは、どこ？

私の意識が。

私の視点が沈んでいく。

潮の匂いがする。

嗅ぐ度に背筋が凍る、あの恐ろしい匂いがする。

波の音がする。

聞く度に背筋が凍る、あの恐ろしい音がする。

ぱつ、と視界が開ける。

「ここは……!?」

私の意識が覚醒する。

陽に焼けて色褪せた壁紙。10の日付まで×が付けられたカレンダー。ずっしりした木製の食器棚。全て、今

はもう無いはずなのに。今はもう無いはずの、あの部屋に私は居た。

何かどろり、と生温かいものが私の指先に触れる。

全身が縮み上がる。

油の切れた歯車のように重く、抵抗する心理を抑えながら指先に首を向ける。

赤い。どす赤い、血。

私の血かと錯覚するほどだった。それくらい私の顔から血の気が引き、眩暈がした。

気が付くと血は血溜りになり、容赦なく私の方に近寄つてくる。

心臓が早鐘を打つ。

血溜りの先に、恐る恐る目をやる。

私が出た。

荒息を吐き、肩を震わせ、呆然と目を見開いたまま座り込む私の姿が。

そして、その目の前には。

揺れる。

揺れる。

視覚が、意識が、頭が、体ががんと揺さぶられる。

再び崩れゆく意識の中で、私の悲鳴が聞こえた。

* * *

『月刊サフィール』についてお姉ちゃんからちゃんと話を聞いたことは無いけど、多方面の業界人や著名人の仕事に密着インタビューする、という企画を任せられているのは小耳に挟んでいた。お姉ちゃんは霧島さんと明日のスケジュールについて、酒を傾けつつ打ち合わせを進めていった。

「お姉ちゃん、霧島さんは妻子持ちなんだからあんまり変なことしないでよ？」

お姉ちゃんは牛スジの煮物を頬張りながらむつとした表情をした。

「バックだね、そんなことしないつてば。そういう叶こそ、さつさとい男見つけたら？ 赤倉さんの件は残念だったけど、いつまでも引きずつてもしょうがないでしょ」

私の元婚約者、赤倉翔一が殺害された事件。あれからもうずいぶんになるけど、最近はお姉さんのことをすっかり忘れていた。

「それにしても、姉妹だけあつて姿形がよく似てますね」

霧島さんも、取材記者が私の姉だと知った時には驚きを隠さなかった。世間は狭いものですね、と言いながら笑つていた。

「霧島さん、よくこちらで飲まれるんですか？」

「ええ。出張で秋田に来た時には必ずと言つていいほど。こちらにも飲み友達がいますし」

その飲み友達こと剣さんは今日は店に来ていない。帰省ラッシュの最中だし、忙しい時期なのかもしれない。

でも、先輩も剣さんもない店で霧島さんが飲んでいるのを見るのは何だか妙な気分だった。

「そういや叶、以前話していた確氷さんって人は？ 東京でドンパチャつた人」

「今日は休みみたい」

雑誌記者をやっているお姉ちゃんが先輩や剣さんについて興味を示すのは当然だ。もしかして先輩は根掘り葉掘り聞かれるのが嫌で休んだ……でも私、先輩にお姉ちゃんのことを何も話してないと思うけどな。

「東京駅でのドンパチャつて、半年くらい前にあつたあの新幹線乗っ取り事件のアレか？」

釜田さんが当店名物の梅チャーハンを炒めるべく、バ

ターを中華鍋に放り込みながら聞いた。

「ここだけの話、あの事件を解き明かしたのは警察じゃないんですよ」

酒に酔ったのか、霧島さんがさりととんでもないことを言った。剣さんの分まで代わりに飲もうとでも考えているのだろうか、今日は『まんさくの花』を筆頭に次々と酒を飲んでいく。

「あの時に新幹線を運転していた剣さん、あの人は実ほとんどでもない推理力の持ち主ですね。どうして鉄道員なんてやってるんだらうってくらい凄いですよ」

このままトワイライトエクスプレスの事件まで剣さんが解き明かしたことを話されてはたまらない。私も説明がめんどくさいから警察が解決したと言っておいたのだから。霧島さんの口を封じるべく、サービスですと称して『福小町』をグラスに注ぐ。

「それは一度会ってみたいですね。そんな推理力の持ち主なら、私が前に聞いた事件も解いてくれるかもしれませんし」

「前に聞いた事件？」

お姉ちゃんは少ししまったという表情をしたが、対照的に私は話題がうまく逸れて表情を緩めた。

「どんな事件なの、お姉ちゃん？」

私がフライドポテトと揚げ餃子を油から引き揚げながら聞く。ここぞとばかりに話題を逸らす。

「何なら、僕から剣さんに投げとおきましょうか？ 彼なら分かるかもしれません」

霧島さんも援護射撃を繰り出す。

「その剣さんって人、信頼されてるんですね」

「そりゃあな」

釜田さんをはじめに、私も霧島さんも頷いた。

「これは、私の知り合いの記者から又聞きした話なんですけどね……」

まだ客でこった返すには少し早い時間、お姉ちゃんは事件の概要を話し始めた。

* * *

栗駒要。その人物が捜査線上に浮かんできてくるのにその時間はかからなかった。都会特有のねつちこい渋滞に絡まれているパトカーの助手席で、私は捜査資料を鞆から引っ張り出した。

「ええと、鹿児島と愛媛の事件に関与しているらしい人物？ 相次いで両県の県警から捜査協力要請が来たけど」

「そうですね。連続殺人となれば大事ですよ」

沖君はハンドルを握り直す。車列はのろのろと動き出した。この七三分けの後輩刑事とタッグを組んでそろそろ1年が経とうとしている。

「八雲警部、昔は鹿児島県警にいたんでしたっけ？」

「まあね。沖君は最初から警視庁でしょ？」

「ええ」

鹿児島から出てきた当初は、東京の警察の規模の大きさと忙しさに面食らったものだ。いつだったか、出水での新幹線絡みの事件があった翌年にこっちに出てきた。かれこれ10年近く前の話になる。

「今回の事件は簡単だといんですけどね」

「どうかしらね。鹿児島、愛媛両県警からの資料によると他に有力な容疑者は浮かんていないみたいだけど。直に会ってみたいことには何とも分からない」

資料が挟まれたバインダーを、肉の乗った腹に立てかけるようにして開く。この忌々しい脂肪の塊とも長い付き合いになる。上京してから不摂生がたたったのか、ますます大きな顔をして居座るようになった。

「その資料、確認の意味も込めて聞かしてもらえませんか？ 散々目は通しましたが」

前方から目を離さずに沖君が頼む。その言葉に従ってページをめくる。

「じゃあ、まずは広島県警の方から」

安芸有華、42歳。彼女は愛媛県の伯方島に近い沖合でバラバラ死体となって発見された(図①参照)。死因は水死。漁師の網に損壊した遺体の一部が引っかかって発見されたという。

「遺体に外傷らしきものは？」

「生前、特に外傷を受けた痕跡は見つかっていないって書いてある。でも遺体そのものはバラバラになっていて、今も胴体の一部が発見されていないの、こらしいわ」

瀬戸内の海は穏やかと聞くが、今は師走。冷たい海中に転落したらそれだけで一たまりも無いだろう。

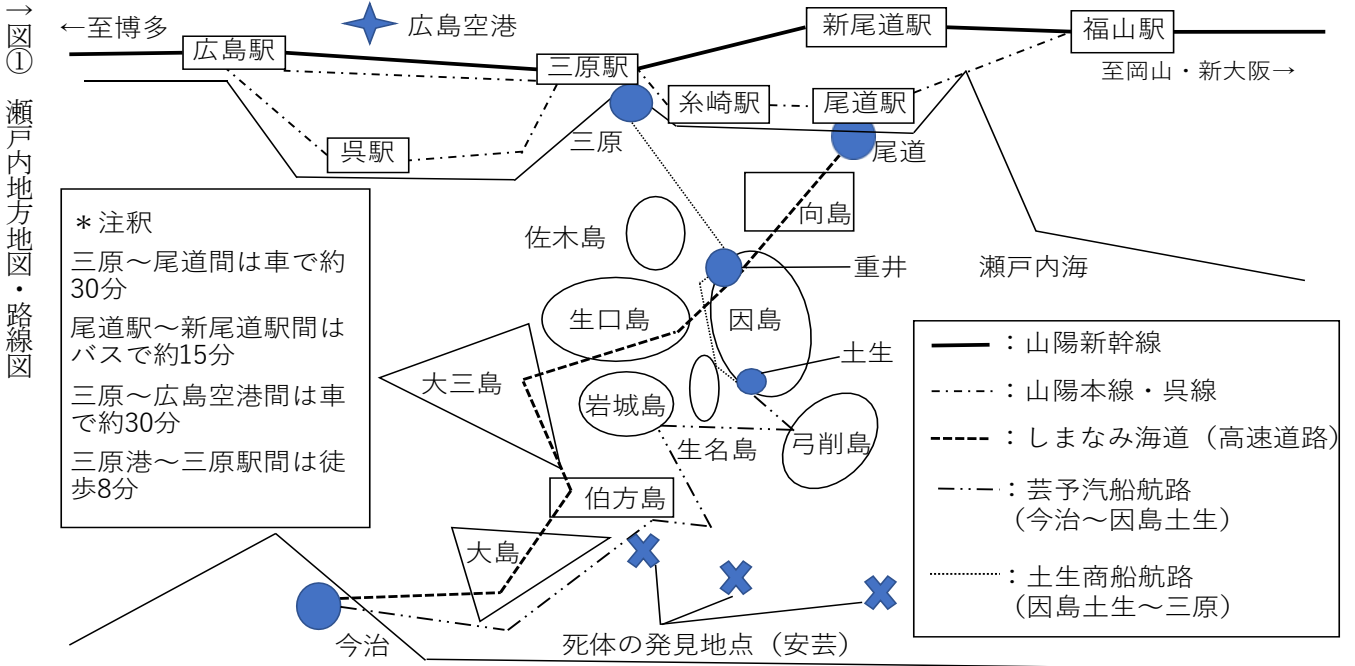
「バラバラ死体ですか……？ どのような感じで切断されていたんですか？」

「向こうの鑑識によると、何か鋭利なもので一刀両断、って感じだったそうよ。何かしらの機械を使って相当な力かけたみたい」

「切断された箇所は？」

「それが、全く一貫性が無いの。機械でたらめに力任せに切断したとはいえ、胴体が斜めに真つ二つにさかれていたり、太腿を割られていたり、かと思えば左手の指先だけ切り落とされていたり。普通、人が機械を使って切断するとなれば何か理由が無い限りはこんな非合理的な切り刻み方はしないでしょ」

沖君も釈然としない顔で頷く。車は再び渋滞で歩みを止める。天気予報では雨だったが、空はどんよりと曇っているだけだ。



「死亡推定時刻は18日の10時から16時の間……少し幅がありますね」

「海中の死体となると、どうしてもね。水温の関係もあって腐敗速度も変わってくるし。遺体が発見されたのが当日の16時だったから、海流による遺体の散らばり具合もこれくらいの範囲で済んでるらしいけど」

私はバイナダーを沖君の方に向けて。でたらめに解体された遺体の写真を見て、彼は少し眉をひそめた。生前はやや小太りの女性だったことを、切り残された下腹が物語っている。

「彼女は広島県福山にある柿崎建工の支社に勤めていて、その日は取引先の石鎚紡績本社がある愛媛県今治に出張に行っていたみたい。今治の会社の方にも12時頃まで安芸がそこにいたって確認が取れている。タオルを作っている紡績会社なんだけどね」

日本の大手ゼネコンの一つ、柿崎建工。半年くらい前に新幹線が乗っ取られた事件にも深く関わっていた。

「紡績会社？ ああ、今治と言えばタオルですもんね。その目撃証言と照らし合わせると、死亡推定時刻は12時から16時の間になりますね」

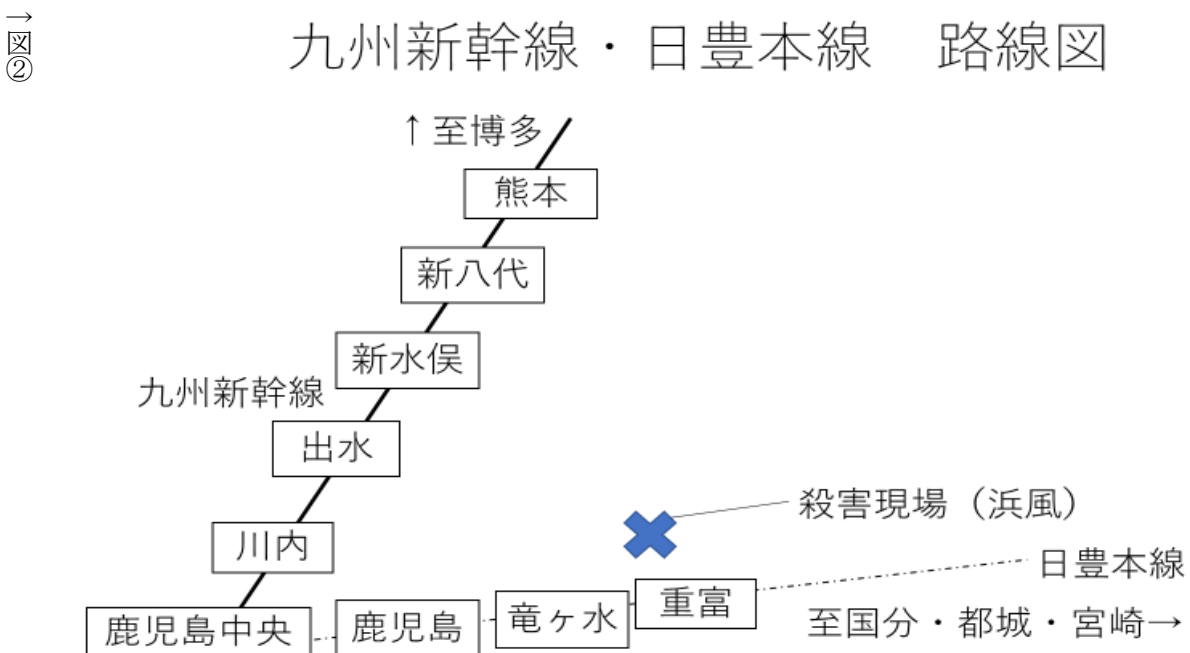
沖君も納得したように一つ頷いた。

「次は鹿児島県警の方ね」

浜風猪三郎、71歳。彼の遺体は鹿児島県の重富という所にある自宅で発見された。重富駅は鹿児島県の中心部から電車で20分ほど行った所であり、彼の自宅はそこから徒歩で5分くらいかかる。閑静な住宅街での惨事だ。

(図②参照)

「死因は撲殺。後頭部を一発ね。凶器は焼酎の瓶。割れた破片が中身と共に現場に散乱していて、被害者の血液が付着していたって」



「焼酎の瓶ですか。いかにも鹿児島らしいですね」
呑気な感想だ。

「死亡推定時刻は18日の19時から21時の間、何かしらの細工が為された痕跡は無かったそうよ」

「痕跡？」

「エアコンで部屋を暖めて死亡推定時刻をずらしたり、みたいな小細工のことよ。以前、鹿児島県警にいた頃に
取り扱った事件でもそういうのがあったわ」

熊本のアパートで起きた殺人事件、出水に住んでいた被害者の兄が犯人だった。あの事件を担当した時にコンビを組んだ黒松警部が今回の重富での事件も担当しているようだ。

あの事件で逮捕した男は確氷という珍しい苗字だった。臼井、ならまだ馴染みがある。東京駅にカチコミをかけたきたあの女性の苗字が確氷だと知った時、妙に逮捕した男の面影が彼女に見えた気がした。気のせいだろうか……いや、もしかしたら？

「八雲警部、続きを」

沖君の声に意識を引き戻される。終わった事件よりも目の前の事件だ。

「現場は浜風氏の自宅の居間で、焼酎の入ったグラスが二つあった。片方は手付かずで残っていて、恐らく犯人が痕跡を残すのを恐れて手を伸ばさなかったものと考えられるわ」

「わざわざお酒をふるまったということは、犯人は浜風氏と親交があった人物と考えられますね」

沖君はそう言っただけでハンドルを切り、首都高を降りる。

「で、このそれぞれの事件の両方の捜査線上に浮かんできた人物が栗駒要。これから会いに行く人ね」

「安芸氏、浜風氏とどういふ関連があるんですか？」

私はページをめくる。

「安芸有華と栗駒要の関係は不明。色々と背後関係を洗っているんだけど、見事なまでに接点が無いのよ。同じ日に今治に出張し、その出張先で出会ったということ以外は何にも」

交差点を右折する。東京はそこら中に車と建物が氾濫して見通しが悪い。パトカーに乗っているとはいえ用心する。

「出会ったということは、全く面識がないというわけでもないんですね。でも出会ってすぐに殺意を抱くような理由ってあるんでしょうか？」

「それが分かれば苦労は無いわよ。面識があると言っても、今治本社の通路の曲がり角で出合い頭にぶつかっただけらしいし」

これは今治本社の人の証言だ。証言者によると双方の荷物がバラバラに飛び散らかって片付けを手伝おうかと思っただけ、先を急ぐ用事があったらどうしようもないでしよう」

「浜風氏の方は？」

「義理の父親なんだけど、栗駒から多くの借金があるらしいのよ。死亡したから遺産と保険金が降りただけで、それが借金の代わりになるのかしらね」

「借金が遺産と保険金という形で栗駒の手元に降ってきたも、殺しがばれて逮捕されてしまったらどうしようもないでしょう」

「でも、動機としては有力よね」

そうやって話しているうちに目的地に到着した。石鎚紡績東京支社。栗駒が待っているはずだ。

* * *

「既にご存じのことと思いますが、この石鎚紡績は今治

に本社を構え、今治タオルブランドの製品を主力としながらも幅広い衣類を生産しています。僕は営業を担当してましてね、更なる販路開拓のためにあちこちを飛び回る毎日です」

栗駒要はそう言いながら私と沖君に椅子を進めた。あまり広くないオフィスのあまり広くない応接室だ。

「それで、僕への話というのは義父の件ですか？」

「それもありませんが、それだけではありません。安芸有華という女性をご存じですか？」

私の目配せに合わせて沖君が写真を出す。生前の彼女の顔写真で、少し眠そうな目が写真の中から栗駒の顔を見つめている。

「いえ、知りませんね」

「彼女はあなたが今治出張に行った18日の12時から16時の間に殺害されました。バラバラにされ、海に沈められたんです」

「バラバラに？ それは惨いことを……犯人の気が知れませんか」

栗駒は心底驚いたようだ。茶色い瞳を丸くしている。

「それともう一件、あなたの義理の父親である浜風猪二郎の件でも伺いたいことがあります」

「つまり、二つの殺人事件の容疑者として睨まれているわけですか。……両者とも18日に殺害されたんですか？ だとすればアリバイがあるんですが」

沖君の表情が僅かに陰った。私もそうだったかもしれ

ない。
「では、18日とその前後の行動を最初から順を追って説明してもらえますか？」

栗駒は黙って黒いスーツの内ポケットから手帳を取り出した。取り出す右手の薬指に指輪が嵌まっている。

「18日は石鎚紡績の今治本社で朝9時から会議があったので、今治には前泊していました。会議は正午には終わりました。そこからJRとバスで松山空港に向かい、14時25分発の全日空592便で羽田に向かい、そこから東京駅に出て……」

予定のメモがまたがつているのか、栗駒は一度言葉を切って、ページをめくる。

「ああ、あつた。16時40分発の『やまびこ69号』で仙台に向かいました」

私はスマホで時刻を調べてみた。飛行機が15時45分に羽田に着く。新幹線に乗り換えるにはちょうどな時間だ。新幹線は仙台に18時33分に着いて、そこから盛岡まで各駅に停まる。(図③参照)

「仙台にはどのような用件で？」

「翌日に営業回りの出張があつたんです。さつきも少し話しましたが、販路拡大のために忙しいんです。特にこの時期は3月に需要が伸びるハンカチの売り込みに攻勢をかけていますね」

「ハンカチですか？」

沖君が少し眉を吊り上げた。

「ええ。年度替わりで離ればなれになる人にお別れの品として渡す人も多いんです」

そんな粋な贈り物とはとんと無縁だ。目の前に座るこの茶髪の男は贈ったり贈られたりしたことがあるのだろうか。

「翌日の商談は何時頃から始まったんですか？」

「正午かつきりのスタートでしたね」

メモをする。仮に栗駒が主張するアリバイが全面的に事実ならば、安芸有華はまだしも浜風猪三郎の殺害容疑については完全にアリバイが成立することになる。

栗駒のアリバイ

今治に前泊

出典：『JTB時刻表2014年1月号』（JTBパブリッシング）

21日

22日 9:00～12:00 石鎚紡績本社会議
14:25 全日空592便で松山空港を出発
15:45 羽田空港に到着
16:40 東北新幹線『やまびこ69号』で東京駅を出発
18:33 仙台に到着 同僚に電話

23日 12:00～ 商談

* 安芸の死亡推定時刻 22日12:00～16:00頃 現場は瀬戸内海、伯方島沖
* 浜風の死亡推定時刻 22日19:00～21:00頃 現場は鹿児島県重富

「そのアリバイを証明できる人は？」

そこまで無愛想になることなく話を続けていた栗駒だが、さすがにこうもずけずけとアリバイを聞かれると少々癪だつたみたいだ。僅かに眉根を寄せる。少しの沈黙があつてから口を開いた。

「そういえば、仙台駅到着前に同僚に電話をしたんですよ。その時に電話をした時に車内アナウンスと、それから仙台駅で降りた時のホームの放送が向こうに聞こえたようです。『アナウンスで仙台つて言っているみたいだけど、もう着いたのか？』つて聞かれました。『今着いた所だ。北の方は寒いよ』つて返しました」

そのまま通話履歴を見せてもらう。通話時間は18日の18時32分から18時34分。『やまびこ69号』が仙台駅に着くのが18時33分だから、おかしな点は見受けられない。後で電話をかけた同僚にも確認を取ろう。

「ところで、今治の本社には工場はありますか？」

沖君が唐突な質問をした。栗駒は私と同じく質問の意図が掴めないのか、少し瞬きして領いた。

「ええ、紡績用のがありますよ。どうかしましたか？」
「使っていない裁断用の機械みたいなものはありますか？」

私は後輩の意図を察した。安芸の死体は何かの機械で力任せにぶつた切られたようにバラバラだった。布を裁つ機械を使ったと踏んだのだろう。荒唐無稽な思いつきだけど、何もないよりはマシだ。

「いえ、むしろフル稼働状態です。生産ラインの増設を行っているくらいですから。工場の新棟を柿崎建工さんに建ててもらっているところですよ」

沖君の思いつきはあつてなく潰えた。安芸氏はこの新工場の件で石鎚紡績本社を訪れたのだろうか。

「もしかして、えーと……安芸さんでしたっけ？ 彼女の水死体をバラバラにした方法を探っているんですか？ 布用の裁断機ではとても人体を切り刻めませんよ。ギロチンじゃないんですから」

そりやそうだ。

それからいくつかの質問を繰り返してみたものの、ろくな成果は得られなかった。諦めて帰ることにしたが、その帰り際のオフイスは何やら騒がしかった。電話の内容に耳を傾けると、今治から大阪へ商品を積んだ船が遅れて納品に間に合わなくてトラブっているようだった。

* * *

その夜、私の元に黒松警部から電話がかかってきた。

『浜風殺しの件で、こちらでも容疑者を一人絞り込んだ。足柄という男だ。メモをメールで送るからとりあえず聞け』

足柄太二はここ最近、浜風氏との仲が険悪だったという。足柄は骨董好きなのだが、浜風に拝み倒されて80万で買った唐の焼き物が2千円もしない偽物で、そこから殴り合いの大喧嘩を繰り返して警察沙汰になったそう

だ。
「それが半年前の話ですか。で、その足柄はどうして捜査線上に上がったんですか？」

『犯行当日に被害者の家を訪れている。浜風氏の遺品のケータイにメールが来ていた』

「メールの内容は？」

『例の80万の焼き物についてだった。18時から話し合う手筈になっていたそう』

パソコンがメールを受信した。開くと、まずは足柄の顔写真が出てきた。刈り込まれた黒髪の男で、正直なところあまり人相は良くない。濃い隈を浮かべた目が写真

の中からじつと私を見つめてくる。

「死亡推定時刻は早くても19時ですが、足柄は何時頃まで浜風氏に会っていたんですか？」

『19時には浜風氏の家を出たと言っている』

聞くからに胡散臭い話だ。浜風氏の死因は焼酎の瓶で殴られたことらしい。酒を酌み交わすような関係かどうかは微妙だが、酒の勢いでつい……ということは十分あり得る。

「犯行の瞬間を目撃したり、不審な人影を見たりという情報は？ とうかそれ以前に、足柄にはアリバイは無くても動機はある、ということなんですよ？」

『事件についてはニュースで知って、それで警察に連絡したと話していた。犯人ならわざわざ警察に連絡して情報提供をしたりはしないだろう。動機が無いとは言わないうが、行動が理不尽だ』

言われてみれば、犯行時刻頃に現場に居合わせた動機のある人間がわざわざ警察に向く理由は無い。自ら敵地に赴くようなものだ。

『そして、何かしら見たのではないかということについて、人とすれ違ったとは話していた。ただ、あの辺は住宅街で浜風氏以外にも住民がいる。現地民か否かまでは分からないらしい』

それでは何も見ていないようなものだ。私は黒松警部に聞こえないようにため息をついた。

「身体的特徴は分かりますか？」

『暗くてよく見えなかったらしく、はっきりしたことは言えないそう。黒っぽい服を着ていた気がするとは言っているが、そんな服はどこにでもある』

本当に何も見ていなくてげんなりした。黒松警部は「丁寧に現場付近には監視カメラが無いことを付け加え、

私の気持ちを更に暗澹たるものにさせた。

『そちらの、ええと……栗駒か？ どうだった？』

「決め手に欠けます。アリバイを主張していますね」

窓の外を見ると、都会のネオンが冷たい雨にけぶっていた。

* * *

「これで話は大体終わりですけど、いくつか補足説明があります」

お姉ちゃんはどこから説明しようかと少し口を閉ざし、ピーチサワーを飲み干す。

「警察は栗駒が電話をかけた同僚にも確認を取って、さつき話したアナウンス入りの電話が本当にかかっていたって証言したみたい。『まもなく仙台』っていう車内アナウンスと、ホームでの『仙台、仙台』ってアナウンスが確かに聞こえたって」

「間違いないの？」

私の質問にお姉ちゃんは頷き、グラスの結露で濡れた手をおしぼりで拭いた。

「味噌汁、お待ちどお」

釜田さんがカウンター越しに注文の品を出す。お姉ちゃんも霧島さんは中を見て思わずぎよっとした。

「釜田さん、その……この白い脳味噌みたいな気持ち悪いものは何ですか？」

「ただみ、つまり鱈の白子だ。知らねえのか？ 今の時期が旬で美味いんだぞ。騙されたと思って食ってみな」

二人は恐る恐る箸を伸ばすが、食べてみたら案外お気に召したようだった。

「クリーミーで行けますね」

「だろ？ 天ぷらもあるが、食うか？」

二人の注文を受け、私は白子に衣をつける。痛風まっ

しぐらだ。

「で……霧島、何か考えはあるか？」

オールバックの小男は少し渋い顔をした。

「剣さんなら何か分かるのかもかもしれませんけどね」

「あいつ、今夜は仕事か何かか？ タイミングの悪い奴だな。大和はどうだ？」

私にお鉢が回ってきた。今回されても困るんだけど。

「うーん……栗駒の話に何か違和感はあるんですけど……」

どの辺で感じたんだろう？ ええと……確か、安芸の死体をバラバラにする機械について話している時に……

「浜風についてはアリバイがある、安芸については動機がねえ。かといって、他に確たる容疑者もいねえ。どうしたもんだか」

「足柄も微妙ですよ、安芸については無関係だと思えますけど」

釜田さんと霧島さんの会話を断ち切るかのように勢いよく天ぶらの衣が爆ぜる。いい頃合いだ。油の海で溺れている白子を引き揚げる……溺れている？

「大和、違和感ってのはどの辺で覚えたんだ？」

何か閃いた気がするけど、どこかに行ってしまった。

さつき感じた通りに話す。

「そんなに変な箇所ってありましたかね？」

「さあ……まあ、三人寄らば何とやらと言うし、それに対して俺達は四人だ。もう少し頭を捻ってみようぜ。

ほれ、手羽先唐揚げ。お待ちどお」

こつてりしたタレ、それに金胡麻と一味唐辛子をまぶした唐揚げを二人の前に置く。なんか今日は揚げ物が多けれど、大丈夫なのかな。

「ただ、栗駒の行動は怪しいですよ。足柄とは逆の方

向に中途半端というか」

味噌汁を飲み干した霧島さんが口を開く。メに味噌汁という人は多いけど、この人は特にそういうわけでもなさそう。

「どの辺がですか？」

「19日の仙台での商談が引つかかるな。正午スタートだったんだろ？ だったら仙台に前泊する必要なんてねえだろ。東京から仙台まで新幹線で2時間もあれば着く。

19日の朝の新幹線に乗ればいいじゃねえか」

「足柄はなんというか、犯人と名指しするには行動が中途半端なんですよ。アリバイとかが無い怪しい立場なのに自ら警察に向いたりして。栗駒は逆に、アリバイを全面的に認めると何だか違和感があるんですよ」

お姉ちゃんは霧島さんと釜田さんの意見に頷いたけど、そこからこう切り返した。

「確かに非合理的に見えますけど、じゃあ電話の件はどうするんですか？ それに、バラバラにされた死体は？」

「そう言われると男二人は言葉に詰まってしまふ。」

「ただみの天ぶら、お待たせしました」

私は二人の前に皿を出す。見ると驚いたことに、さつきまで山盛りになっていた手羽先の唐揚げがもう僅かしか残っていない。胡麻と一味が浮いたタレの中に、カリカリした衣が溺れるように浮かんで……溺れている？

溺れている？
私は大声を上げた。

* * *

降りしきる雪が前面窓を叩く。眩い前照灯が踊り狂う雪を浮かび上がらせる。真っ白な前照灯が照らすことができる範囲はそう広くなく、本当なら鮮やかな茜色なはずが雪で真っ白に染まった列車の鼻先、闇、雪、それく

らいた。レールは雪に埋もれている。

大曲を出て、次は終点の秋田。僕は荒天の中、『こまち43号』を走らせていた。

嫌な天気だ。ここ最近、年末の帰省ラッシュで忙しくて瑞穂さんにも会えていない。彼女も忘年会シーズンで忙しいのだから。僕が秋田に帰る列車を知らせても、既読すらつかない。

霧降荘の事件の後、瑞穂さんはあまり元気が無かった。そばにいていては良かったけど、僕にも暮らがある。やむを得ず列車を走らせるしかなく、瑞穂さんのそばに付き切りというわけにはいかなかった。

そばにいて下さい！

あの日、僕は瑞穂さんにそう言った。

あの時から彼女が好きだったのかもしれないし、今はその気持ちもずっと強い。

強い。

生涯の伴侶になってほしい。そう頼もうとするほどに。

あの事件で告白のタイミングを失ってしまった。

決意は胸の内に、渡そうとした指輪は渡さずじまい。

赤い灯を通過し、警報音が横切る。踏切だ。遠くに秋田市街の灯が見えた。

青信号を通過する。

「制限、130。進行」

* * *

「どうした、大和？ そんな素っ頓狂な声を上げやがって」

「やっぱり犯人は栗駒ですよ！」

「はあ？」

私の叫びにお姉ちゃんと霧島さんは身を乗り出す。

「だって、警察は安芸さんの死因は話していないじゃないや

いですか！ 『バラバラにされ、海に沈められた』って
言っただけです！ そうでしょ、お姉ちゃん？」

「え、まあ……そうだったはずだけど」

「でも栗駒は最後の方、布用の裁断機の話をする辺りで
『安芸の水死体』って明言しているでしょ？ 警察は安
芸さんの死因について一言も話していないのに、どうし
て栗駒は安芸さんの死因を知っているんですか？」

この閃きに私は興奮を隠せなかった。と同時に、普段
から一足先に真相に辿り着く剣さんの気持ち少し分か
った気がした。

「……あー、そういうことか！ 栗駒が安芸の死因を知
っているのは栗駒が安芸を殺した張本人だからか！」

釜田さんも合点が行ったみたいだ。

「でかした、大和！ そうなりや浜風殺しも栗駒だな、
一人殺せば二人殺しても一緒だろ。しかし、安芸をどこ
で殺したんだ？ 遺体はどの辺に浮かんでいるって言っ
た？」

「伯方島近くの沖合にバラバラになって浮かんでいたっ
て話みたいですよ」

「ふうむ……」

お姉ちゃんの言葉に霧島さんは考え込んだ。既に何杯
もグラスを空けているはずなのに、表情はしゃっきりと
している。

「とりあえず、現在考えられる可能性は二つですね。ま
ず一つ。栗駒は安芸さんを何らかの方法で殺害した後
に仙台に向かった。もう一つ。栗駒は何らかの方法で仙台
のアリバイを偽造し、安芸さんと浜風さんを殺害した。
そして翌日にも仙台入りして、正午の商談に参加した」

霧島さんが整理する。剣さんならもうこの時点で真相

が見えているのかもしれないけれど、凡人集団にはそん
なことはできない。ここは地道に知恵を出し合っていく
しかないみたいだ。

「で、ここからどうしたもんかなあ」

釜田さんはつむじ周りが少し薄くなった頭をぼりぼり
と掻く。

「でも、どうして栗駒は安芸さんをわざわざ溺死させて
からバラバラにしたんでしょうね？」

みんな揃って渋い顔をする。私も含めさっぱり見当が
つかないみたいだ。

「遺体は全部見つかったんですか？」

「細かな肉片は出ていないみたいですけど、大まかなパ
ーツは揃ったみたいですよ」

霧島さんの質問にお姉ちゃんは素直に答えたけど、食
事時にするような話じゃない。どっちもあまりいい顔を
していなかった。

「俺達みたく善良な小市民的な発想で考えてみよう。死
体をバラバラにする理由は持ち運びを簡単にするため、
ってとこか？」

とても善良な小市民らしくない物騒な発言で笑ってし
まった。大体、善良な小市民は死体をバラバラにしたり、
それ以前に殺人なんてしない。

「でも釜田さん、以前のトワイライトエクスプレスの事
件では別の理由だったそうじゃないですか」

「ああ、あの首と両手だけが切断された奴か。あれは確
か……」

釜田さんが事件のあらましを話すにつれて、当時の心
境がはつきりした輪郭を持って蘇ってきた。そう。忘れ
たくても忘れられない、あの事件。私の最後の乗務。あ
んな血生臭い幕切れを迎えるとは思わなかった。

「そーいやあの事件、白雪の判決はどうなったんでしょ
うね？」

「さあな。小田原での殺しだけでもそれなりの年数にな
ると思うが、事業の方でも色々やらかしていたんだ
ろ？ それ自体がああ事件の動機でもあったしな。それ
を踏まえるとかかなりの年数になるんじゃないか？」

とても元夫とは思えないくらい感傷のかけらもない物
言いだ。そういう私も、翔一君のことを段々思い出さな
くなってきている。同じことかもしれない。過去を押し
流す時の力は強く、その流れは無常だ。

「小田原に裁判の傍聴に行っただけ、あいつのことは何
も知らねえからな」

「でもあれですよ、小田原の現場に白雪以外の誰かが
侵入した痕跡があったって裁判で言ってますんでしたっ
け？」

「うーん……あつたな、確かに。あれって何だったんだ
ろうな？」

会話を打ち切るようにお姉ちゃんがパンパンと手を叩
いた。

「はいはい、とりあえず終わった事件は置いといて、今
は目の前の事件！ 叶、『黒霧島』をロックで。話聞いて
たら飲みたくなってきた」

意地悪な打ち切り方のように見えるけど、そっと私に
投げる視線は冷たくない。これ以上、殺された私の婚約
者のことが話題に出ないようにしてくれたんだろう。私
はそんな配慮に頼らなくてもいいくらいには立ち直って
いるけど、今はその気遣いに甘えておこう。慣れた手つ
きで焼酎をグラスに注ぐ。

「どこからこの話になったんだ？」

「ほら、どうして栗駒は死体をバラバラにしたのかって

話ですよ。今のところ持ち運びしやすい説、証拠隠滅説が出ていますけど、他に何かありますか？」

「ベタですけど、栗駒が安芸さんのことをめっちゃめっちゃ恨んでいたとかですか？ ……あ、駄目か。そもそもあの二人は面識がほとんど無いって話でしたもんね」

あれやこれやと意見を交わしてみた結果、きつかけとして考えられそうな出来事が絞られてきた。

「きつかけとして考えられそうなのはあれか？ 廊下で安芸とぶつかって荷物をしつちやかめつちやかにしたってことがあっただろ」

「ありましたね。ですが、たかが荷物を落とした程度で人殺しなんてしよつたらきりがないでしょう」

私も領きながら焼酎をお姉ちゃんに渡した。

「でも、他に思い当たる節も無さそうですね。接点も無さげです」

「だとすると、やつぱりあの衝突に何か理由があるんだろうな。荷物にヤバイブツでも混じってたりしたか？」

そんなことは無いと思うけど。

「でも、荷物の中に何か見られたくない物が入っていて、安芸さんはそれを見てしまったのかもしれないね。それで口封じのために殺された」

「仮にそうだとすると、見られたくねえ物って何だよ？」

「凶器とかですかね…あ、でも違うか。安芸さんは水死やし、浜風さんも現場にあった焼酎の瓶で撲殺されたんやっつた。…釜田さん、山芋焼きを」

凶器ではないにしても、何か今回の事件に関わるものだったら筋は通る。釜田さんは注文を受けて擦り下ろし山芋を勢よくフライパンに放り込む。

「きつぷとかじゃないですか？」
「きつぷ。」

私は鯉節の用意をしながら、お姉ちゃんの思いつきにオウム返しをした。

「栗駒が浜風殺しの犯人なら、どうにかして鹿児島現場まで行ったんですね？ それなら車じやなくて飛行機か新幹線でしょ、あんなに遠いんですから。前もって鹿児島に行く切符を買っておいて、それをぶつかつた時に落として安芸さんに見られちゃつたとしたら？」

「確かに、行先が割れたら万事休すだな」

他に考えられる動機は無さそう。思いつかない。それに、その説が正しいなら浜風殺しの犯人が栗駒であることの裏付けにもなる。…それにしても、切符を見ちゃつただけで殺されたのならたまらない。

「動機はとりあえずこれでいいだろ。次に行こう。どうやってバラバラにしたと思う？」

釜田さんの言葉に私達は思考の方向をホワイダニットからハウダニットに変える。

「トワイライトエクスプレスの時は列車で轢断したんですよね？ 今回は列車は関係無さそうですけど」

「だが、そういうのなら死体が無秩序にバラバラになることにも説明がつかない。自分でどこをぶつた切るのか制御できねえんだから、あんな無秩序な切り刻み方になつてもおかしくねえだろ」

でも、列車による轢断の可能性はすぐに潰れた。霧島さんが調べたところによると、当日の今治付近の鉄道は事故はおろか遅れが少しも出ていなかったという。

「山芋焼き、お待ちじょお。鉄板が熱いから気を付けろよ。死体をバラバラにする方法って、他に何かあるか？」

「ありますかねえ？」

私と釜田さんは特に変な気持ちでこんな会話をしているわけではなかったが、傍から見たらとんでもなく物騒

な会話だっただろう。熱々の山芋焼きを霧島さんに出しながら交わす会話ではない。鯉節が湯気に踊っている。

「飛行機のプロペラで敵をバラバラにして倒す、ってのはアクション映画でありましたけど。何の映画だったかな？」

「インディージョーンズじゃないですか？」

「そんなシーンあつたっけな？ というか、飛行機のプロペラでそんなことしたら大騒ぎになるだろ。却下だ却下」

「まあ、そうなりますよね」

霧島さんとお姉ちゃんが出した案はただの与太話みただい。

「でも、そういう乗り物は良い線を出ているんじゃないですか？ 電車なら車輪、飛行機ならプロペラ。回る物って乗り物に多いじゃないですか」

「その考えで行くと船のスクリューもありますね。映画で大型船のスクリューがモーターボートを千切りにするシーンもありましたし」

「それもインディージョーンズか？」

「ええ、『最後の聖戦』冒頭のアクションですね」

男の人ってそういう映画好きよね、って前に先輩が言っていたのを思い出す。剣さんと映画館デートに行つた後だったかな？

「船を千切りにするって言いました？ それができるなら人体くらい容易くバラバラにするでしょうね。砂肝と『高清水』の冷を」

「だろ。スクリューの回転による水流で死体があるまま流されなければの話だが。とはいえ、安芸の死体は現にバラバラになっている。船のスクリューでバラバラにされたって考えていいんじゃないか？ あいよ。高清

水冷一丁！」

酒がだいぶ回ってきたのか、お姉ちゃんの物言いがますます物騒になってきた。私は少し面白がりながら一升瓶を冷蔵棚から引っ張り出す。釜田さんは元からの口調の荒さに拍車がかかっている。

「船のスクリーンでバラバラになったのなら、でたらめに切断されていたことにも説明がきますね。自分でどのように切断するのかを制御できないんだから」

「これで方法は割れたな。栗駒って言ったか？ あいつ、バラバラ死体って聞かされたときにえらく驚いていたみたいだが、本人はバラバラにしていなかったのかもな。死因は水死って話だ。安芸殺しについては彼女を海に突き落とすだけで、バラバラにされたのは殺害後の偶然だったのかもしれない」

「瀬戸内は水運の要衝ですからね、漁船も貨物線も海上自衛隊の船も通ります。船のスクリーンに巻き込まれても不思議ありません。八雲警部が栗駒の元を去る時にかかってきた電話。あれ、確か船のトラブルで荷物の水揚げが遅れるみたいな電話やったし……もしかしたら、その船かもしれないね。安芸の遺体をバラバラにしたんは」

釜田さんは料理人という職業を放り出して話を進める。お姉ちゃんや霧島さんも乗っかって私は置いてきぼりだ。私や先輩には普段からさぼるなさぼるなっていうさいくせに。それにしても先輩はどうしたんだろう？

「じゃあ、栗駒は今治の港かどこかで彼女を突き落とすって、その遺体が船のスクリーンでバラバラにされて、遺体の一部がえーと、どこでしたっけ？ 伯方島か。伯方島沖で発見された。で、栗駒は今治から鹿児島に向かって次の凶行に及んだ。こんな感じですかね？」

お姉ちゃんがまとめにかかる。けど、それに水を差した人がいた。

「それはどうですかね？ 瀬戸内海ってとても波が穏やかなんですよ。海流自体はとも速いので海の難所なんです。それでも港から遺体を捨てて沖合に流れ出すというのは難しいと思いますよ。それに、今治から死体が発見された伯方島の間にはいくつか他の島があります。それを避けながら遺体が今治から伯方島まで海流に乗っていくってのは……ちよつと考えにくいかな、と」

霧島さんが難色を示した。じゃあ、今治から鹿児島に直行することは無理ってこと？ 少なくとも伯方島辺りまで行く必要があるみたいだ。

「おでん下さい。こんにやく、じゃがいも、餅巾着」

「あ、牛スジと大根と玉子、それにはんぺんも追加で」

「あ、いよ！ ……海に突き落とされたのはどの辺なんだろうな？ あの辺、確か本州に繋がる橋が架かってなかったか？」

「あ、しまなみ海道のことですね」

おでんを待ち侘びる国交省の役人が間髪入れずに答える。生まれが高知って前に話していたし、あの辺はホームグラウンドなんだろう。そのまま霧島さんはスマホをいじり、しまなみ海道の路線図を出す。複数の橋が島伝いに愛媛の今治と広島島の尾道を結んでいる。

「瀬戸内海ってこんなに沢山の島があるんですね。これじゃあ今治から遺体も流れても、伯方島よりもっと手前の島に邪魔されてしまいますね。大島とか。霧島さんが今話してくれた奴ですか」

「この辺は昔、村上水軍の根城やったんですよ。村上海賊とも言いますね。海賊と言っても略奪をするだけでなく、この海域を通る船の水先案内人として安全な航海を

サポートしよった面もあるようです。海底が歩けるほど浅い部分もあるので、座礁や沈没が絶えないんです」

私もお姉ちゃんも瀬戸内の方にはあまり縁がない。霧島さんが語る村上水軍の話も初めてだった。こういう島々の地図を見るのは新鮮だった。おでんの具を皿に取りながらだつたから、あまりちゃんと目を通せなかった。

「じゃあ、どこで彼女を海に放り込んだかだな。瀬戸内海はあまり波が立たないって言ったな、霧島？」

釜田さんは霧島さんが頷いたのを確認して続ける。

「ってことは、港から海に放り込んでこそまで遺体が流されたりしねえってことだ。とどのつまり、安芸は沖合で海に放り込まれたということになる」

「じゃあ、栗駒と安芸はどうやって沖合に行ったのか、ってことがミソですね」

私はそう言い、考える。沖合に行くのに一番手っ取り早いのは橋を渡ることだ。

「しまなみ海道って車しか通れないんですよね？ 瀬戸大橋は電車も走りますけど」

「車と、それに自転車も通れますよ。歩道があるので」

霧島さんはお姉ちゃんの質問に答え、しまなみ海道の公式ホームページを見せる。ほんとだ、ロードバイクで気持ちよさそうに海を渡る人の写真が載ってる。

「この橋の上から突き落とされた、とかですかね？ 伯方島の辺りで」

私は湯気の立つおでんを出しながらあてずっぽうを言った。釜田さんがそれを否定した。

「そりゃねえな。こんな高い所から突き落とされたとなれば、死因は水死じゃなくて転落死だ。突き落とされた高さによっちゃ、海面に叩きつけられた時の衝撃はコンクリートよりもでかいから。遺体に何かしら痕跡

が残っているはずだ」

「つてことは、栗駒は伯方島で彼女を海に突き落としたりしてことですかね？ 彼女を車で島まで連れて行って、殺害した」

「いやー……わざわざ伯方島まで出向いてから殺す必要ってあるか？」

霧島さんの意見はもつともらしいが、釜田さんの疑問には答えられない。熱々の餅巾着で口が塞がっているのもありそうだけど。

「それに、瀬戸内海は波が穏やかなんだろ？ 伯方島で彼女を海に沈めたんなら、沖合に死体が流れるか？」

「あ、そっか」

海流は早くても港の中は別だつてことを忘れていた。

でも、これだと安芸が殺害された場所は伯方島じゃないことになる。今治も駄目、伯方島も駄目、じゃあ他には？ 「一度整理しましょう。栗駒が安芸を殺害した場所について」

餅巾着を『福小町』で流した霧島さんが話を進める。

「まず、安芸の死因は水死やった。つまり、水に近い所である必要がある。港とかは好例ですね。でも、港内は波が穏やかやから、港で殺しても沖合に死体が流れ出すとは考えにくい」

そこで一度言葉を切り、『高清水』に手を伸ばす。

「つまり、殺害場所は以下の条件を満たす所になります。沖合で、海に近い所です」

お姉ちゃんと釜田さんが手を打った。

「船だ！」

「そっか、今治から船に乗って、その船から突き落としたりして寸法か！」

霧島さんはまたスマホをいじる。

「今治から出る船は……これかな？」

スマホを見せてくれる。覗いてみる。芸予汽船って会社のホームページみたいだ。

「今治を12時30分に出る高速船があるんですが、これが因島の土生いんのしま はぶつて所に13時40分に着くんですよ。」

途中、伯方島の木浦つて所に13時05分に寄るみたいですよ」(図④参照)

「木浦……安芸は伯方島の沖合で見つかったつて話じゃなかったか？ ドンピシヤじゃねえか。死亡推定時刻も12時から16時の間だったはずだし、時間的にも矛盾しねえぞ。木浦が出るのは13時05分なんだからな」

栗駒と安芸、二人はこの船に乗った。そう考えていいのかな？

「じゃあ、今治からレンタカーでも借りてこの船に乗って伯方島に向かい、そこから橋で尾道に渡ったつて感じですかね？」

「あー、いや、それなんですけど……この芸予汽船つて高速船なんですよ。フェリーやないので、車は積みません」

お姉ちゃんの考えを霧島さんは歯切れ悪く否定する。

「じゃあ、伯方島からどうやって仙台に行ったんでしょうね？ 島でレンタカーでも使つて本州に渡り、そこから飛行機とかですかね？」

「伯方島にレンタカーなんてあるのか？」

釜田さんの疑問ももつともだ。これも霧島さんが調べてくれた。

「無さそうですね。しまなみ海道沿いの島に範囲を広げると因島にあるみたいです。あるにはありますが、全国チェーンのものじゃなくて個人経営のものみたいです。足がつくでしょうし、避けると思いますよ」

時刻表

出典：『JTB時刻表2014年1月号』（JTBパブリッシング）

芸予汽船（今治→土生）

今治港	12：30発
木浦港（伯方島）	13：05発
岩城港（岩城島）	13：17発
弓削港（弓削島）	13：30発
土生港（因島）	13：40着

土生商船（土生→三原）

土生港（因島）	13：59発
立石港（生名島）	14：02発
重井港（因島）	14：20発
鶯港（佐木島）	通過
三原港	14：35着

本四バス（土生→尾道）

土生港	14：05発
尾道駅	14：53着

「ならばバスはどうだ？ 尾道に渡る高速バスとかあるんじゃないかね？」

「それも霧島さんが調べてくれた。大根を齧りながらスマホをつつく姿はあまりお行儀が良いとは言えない。」

「伯方島を発着する高速バスは無さそうです。14時05分に因島の土生港から山陽本線の尾道駅に向かう高速バスがありますね。でも、本州に入った時点で既に15時前です。確か、栗駒は18時半くらいに仙台駅から電話したんでしたっけ？ その時間までには仙台に着けませんよ、たった3時間半しかないのに広島から仙台に行くなんて不可能です。新幹線なんて尚更、話になりません」

「あつちや……」

「ここで行き止まりだ。安芸さんを殺害した方法が分かってても、栗駒が仙台にいたというアリバイを崩せないんじゃないでしょうもない。」

「とりあえず、栗駒が安芸を殺したのは栗駒本人の証言から確かですよ」

「そうだな、大和。その前提からひっくり返すのは無理だ」

お姉ちゃんも難しそうな顔で牛スジの名残の串を啜えている。ついさつき頼んだはずの『高清水』はとつくに空になっていた。

「伯方島の辺りで安芸を海に放り込んだ後、今治に戻って、そこから仙台に向かったとか？」

「それも時間がかかりすぎるでしょ」

お姉ちゃんの言う通りだ。

「栗駒の野郎、本当に仙台にいたのか？」

「同僚が栗駒との電話で仙台駅のアナウンスを聞いたって証言だけみたいですけど、それが嘘の証言って聞いた

いんですか？」

「ああ。嘘の証言というか、電話先の同僚に自分の居場所を錯誤させたんじゃないかねかって思ってる」

「仙台駅におらずして仙台駅のアナウンスを聞かせる方法……そんなものあるのかな？」

「栗駒が安芸殺しの犯人ってことは間違いねえ。そこから先の展開は二つだ。一つは栗駒本人が言った通り仙台に向かった。これには車内アナウンスって証拠がある。しかし、安芸を殺害してから仙台に行くのは時間的に無理だ。ってことは、もう一つの展開が考えられる。栗駒は仙台に行かなかった」

「仙台に行かなかったって……なぜ？」

「霧島よ、お前の頭は帽子掛けか？ 鹿児島にいる浜風を殺すために決まってるじゃないか。そうすると仙台駅のアナウンスは偽のアリバイ工作ってことになる。それを崩せねえかって今考えているんだ」

私は無い知恵を絞り、駄目元で意見を述べる。

「録音とかどうですか？ 仙台駅のアナウンスを前もって録音しておいて、それを電話する時に再生したとか。今は音源も動画サイトに色々あるでしょうし」

「できなくはねえと思うが、音質が悪くてバレるんじゃないかね？」

「ですよねえ」

私の思いつきが否定されるのは今日で何度目だろうか？ というか、この考えは釜田さんが口火を切ったものでしように。

「同僚の聞き間違いってことはないですか？ 駅のアナウンスでは他の駅のことを言っているのに、仙台とよく似た読みの駅名やったから聞き間違えたとか」

「苦しくねえか、霧島？ 車内放送と駅のアナウンス、

両方を聞き違えるってのは無理があるだろ。そんな杜撰なアリバイ工作、聞き間違いをされなかったら万事休すだ。大体、似たような駅名って今治とか鹿児島とかあの辺にあんのか？」

「どうでしょうね……？ 調べてみましょうか」

スマホの画面を切り替えて路線図を呼び出す。でも、霧島さんはそこで音を上げて、やけ気味にこんやくを口に放り込んだ。からしをつけすぎたようで涙目になっている。

「調べるってたって、こんなにたくさん駅を調べきれませんよ。何百何千もあるやないですか」

「落ち着いて下さい、尾道から鹿児島まで行くとなれば新幹線か飛行機のはずです。だから、まずは新幹線の駅に絞って調べましょう」

お姉ちゃんがとりなして霧島さんの手からスマホを取る。何だかんだであれこれ飲んでいるはずなのに、そこまで酔っていないみたいだ。スマホをつつきながらじやがいもの欠片を箸でつまもうとしている。

「新尾道からえーと、鹿児島中央？ ここが終点か。普段は乗り換えサイトばかりで路線図なんて見ないので、こうやって路線図を見るのは新鮮ですね」

そのまま路線図を目で追うけれど、発見は無かった。

「仙台に似たような駅名なんて無さそうですよ？」

「路線図で調べるのがまずいんじゃないかね？ 乗り換えサイトの予測変換を見てみようぜ、何かあるかもしれない」霧島さんのスマホはお姉ちゃんの手から釜田さんの手に渡った。

「えーと、せ、ん、だ、い、……真つ先に出てくるのは宮城県の仙台だが、他にも色々あるな。「川」に「内」って書いてせんだいって読むのか」

「ええっ!？」

お姉ちゃんが椅子を蹴って立ち上がった。

「どうしたの、お姉ちゃん? そんな変な声を出して」

「だってその漢字の駅、さっきの路線図にあったから…」

…

店内は騒然となった。

* * *

20時57分。

僕は、『「まち43号」を定刻通りに秋田駅に到着させた。ドアが開き、乗客が降りる。前照灯を切り、尾灯を点ける。ここから列車を車両基地に回送させなければならぬ。荷物を鞆にまとめ、反対側の運転席に向かう。本当は運転席の扉から外に出てホームを歩くのだが、今は厳寒。ホームには雪が積もり、寒風が吹き抜けている。列車の中を通つていこう。みんなそうしている。そう思つて、客室に繋がる扉を開けた。

グリーン車だ。青系のシックな色合いのシートが整然と並んでいる……そう思つたら、少し奥まった席に男が一人座っている。

「あの、お客様?」

回送させて車庫に入れるのだから降りてもらわないといけない。でも、声をかけても返事は無い。

「お客様? 終点です。お降り下さい」

男の座る席の真横に立ち、声を掛ける。

男は僕の方を見た。痩せた体に癖っぽい黒髪。割と整つた顔立ち。黒っぽくて小さい鞆を持っている。

「お前が劔か」

「は?」

「お前が劔礼士か」

男は僕の目を見た。そして、何だか不快な笑みを浮かべた。

「ええと、はい。そうですが」

そこからの男の動きは素早かった。男は鞆に手を突っ込み、取り出した。

「死ね」

刃物を差し込んできた。

* * *

「川内つて……おいマジか、川内の次が鹿児島中央じゃねえか!」

釜田さんが叫ぶ。

「いずれにせよ、これで大体のトリックは割れたな。九州新幹線、鹿児島県にある駅で川内つてのがある。電話

は18時32分から34分の間にかげられた。川内駅にその時間に着く列車があるか?」

そのまま川内駅の時刻表にワープする。もはや料理すら放り出して調べる。

「ビンゴ!」

半分は酔っ払い同士の与太話のはずだったのに、まさか

かの展開を呈し始めた。

釜田さんが私達に見せたのは九州新幹線『さくら417号』博多始発で鹿児島中央まで向かう新幹線だ。見ると確かに、18時33分に川内駅に着く。東北新幹線『やまびこ69号』が仙台駅に着く時間と同じだ。

「栗駒のアリバイとやらも、『新幹線の車内アナウンスで『間もなくセンダイ、センダイ』つて言っているのを聞いた』つてのと『センダイ駅のアナウンスを聞いた』つてことだろ? 音声だけなら宮城県の仙台駅か鹿児島県

の川内駅か分かりっこねえだろ。栗駒は電話口の相手に自分の居場所を宮城県仙台だと思わせておいて、実際には鹿児島県川内にいたつてからくりだ」

仮に栗駒が九州新幹線川内駅でのアナウンスをアリバイ工作に使つたとしたら、様々な疑問点に光が差してくる。

鹿児島県の重富にある浜風さんの自宅にどうやって行ったのか? 鹿児島にいたのだから問題ない。

どうして翌日正午からの商談に合わせて仙台に前泊したという証言をしたのか? 『やまびこ69号』に乗つて、仙台に18時33分に着いたように見せかけることが絶対条件だったからだ。その時間に仙台に行く全うな理由は前泊くらいしかない。

どうして『やまびこ69号』なのか? 『やまびこ69号』が東北新幹線仙台駅に18時33分に、『さくら417号』が九州新幹線川内駅に18時33分に着くからだ。栗駒がリアルタイムで川内駅のアナウンスを電話で流して、電話先の同僚に仙台駅にいると思込ませることができるところだ。

「じゃあ、ここからは逆算して考えてみましょうか」

霧島さんが『雪の茅舎』を、お姉ちゃんがパソコンを注文し、仕切り直す。

「浜風さんの死亡推定時刻辺りで重富駅を発着する列車、それが『さくら417号』に接続できるか。また重富から翌日正午までに仙台に行けるか。まずはこの辺りから攻めてみましょうか」

調べてみればすると繋がった。川内で一本後の新幹線に乗って鹿児島中央に出て、そこから普通電車に乗れば重富に着く。犯行時刻とほぼ一致する時間だ。犯行

を済ませてから重富を出て仙台に行くとなれば、翌朝の飛行機で10時半くらいに着くのがせいぜいだけど、それでも商談には間に合う。

「残る問題は、伯方島から『さくら417号』に乗ることが出来るか、ということになりますね」

『さくら417号』は博多始発だから、乗るなら博多まで出なくちゃいけない。因島に一番近い新幹線の駅はどこだろう？

「伯方島から本州に出て新幹線に乗るとなれば、橋を渡って新尾道に出るのが一番近そうですね」

お姉ちゃんがスマホの地図アプリを見ながら言った。私もパソコンを運びながら覗き込む。

「でも、伯方島を発着するバスは無いんでしょう？ 車も使えないし、どうしよう？」

「船で他の島に出ちまえよ。バスか何かあるだろう」

釜田さんの提案に沿って調べる。今治からの船の終点因島土生を発着する尾道駅行き的高速バスがあった。

「このバスに乗って尾道駅か新尾道駅に出れば新幹線に乗れる。それで大丈夫だろ」

「そうですか？ 新尾道ってかなり山奥ですよ。尾道市内からバスで15分くらいかかりますし」(図①参照)

「ふうむ……まずは調べてみようぜ。新尾道から乗るとなれば何時の列車だ？」

土生を14時05分に出るバスだと、尾道駅に14時53分に着く。そこからバスで15分かかると考えると、新尾道駅に着くのは乗り換え時間を抜きにしても15時10分くらいだ。(図④参照)

山陽新幹線 時刻表

出典：『JTB時刻表2014年1月号』（JTBパブリッシング）

こだま743号

岡山	14:00発
(中略)	
新尾道	14:50発
三原	15:00発
東広島	15:12発
広島	15:22着
(以下略)	

さくら559号

新大阪	13:59発
(中略)	
広島	15:31発
小倉	16:18発
博多	16:34着
(以下略)	

さくら417号

博多	17:10発
新鳥栖	17:24発
熊本	17:48発
新八代	18:00発
新水俣	18:13発
出水	18:21発
川内	18:33発
鹿児島中央	18:45着

「乗るとすれば『こだま745号』新尾道を15時50分発か」

そのまま釜田さんが調べた結果、『こだま745号』では『さくら417号』に接続できないことが分かった。

「一本前の『こだま743号』なら広島、博多と二回乗り換えて上手く行くんだが、それだと新尾道から乗るのは無理だな」(図⑤参照)

「新尾道駅は遠いですからね。尾道駅からならどうですか？ あそこら他の新幹線乗換駅に向かうとか。あの辺は中規模の都市が多いので、新幹線が停まる駅も多いんですよ。三原なんて普通列車でも尾道から二駅ですし」

霧島さんの提案を受けて、釜田さんが尾道駅の時刻表を調べた。さすがにもうおでんの皿は空で、淡い出汗の色と濃いからしの黄色が僅かに皿の底に残っている。

「15時10分に出る普通列車が三原に15時23分に着くが、これも駄目だな。三原から乗れるのはさつき没にした『こだま745号』だ」

「そうですか……福山はどうでしょう？ 鹿児島に行くには逆方向ですが、あそこも普通列車でも数駅ですし、尾道からそこまで遠くないはずですよ」

一応調べてみたけど、これも駄目だった。

「普通列車では福山に15時34分着だ。これだと『こだま745号』にすら間に合わねえな」

つまり、尾道から列車で行く方法は皆無ということだ。どうする？ 尾道が駄目ならどうしようもねえぞ。必ずつどこかにトリックがあるはずなんだが。霧島、心当たりはあるか？ あの辺実家だろ？」

「僕の地元は高知ですよ？ 瀬戸内とは全然縁がありません。山を越えて脱藩しないとイケないんですから」

地元の英雄、坂本龍馬になぞらえて反論する。でも、

地理的には私達よりもずっと縁が深い。現に、尾道駅と新尾道駅の立地関係を把握している。

「尾道から三原まで普通電車で二駅って言ってしまったよね？ それくらい距離だったらレンタカーで行けるんじゃないですか？」

お姉ちゃんのアイデアを調べてみたけど、尾道から三原まで車で小一時間くらいかかるようだ。これも駄目だ。「土生から本州に向かうには……橋が一番早いですよね。でも橋が駄目なら他の経路ってあるんですか？」

お姉ちゃんが匙を投げたように背もたれに寄り掛かる。いや、ただ単に呑み過ぎて体の感覚が狂ったのかもしれない。「泳げばどうですか？」

私もやけくそになって言った。頭の中がこんがらがっている。「泳ぐってお前なあ、もう少し真面目に考えろよ」

「失礼な、これでも大真面目ですよ」

釜田さんが笑いと共にツツコミを入れるけど華麗に躲す。

「泳ぐ……そうだ、船があったりしませんか？」

お姉ちゃんが背もたれから体を起こした。

「土生から船で本州に渡るって言うのか？ さすがにねえと思うがなあ、船ってそんなに速くねえだろ」

そう言いつつもスマホで調べる辺り、釜田さんは私やお姉ちゃんよりも根気がある。お姉ちゃんは口だけ出した後、パインサワーを飲み干してまた背もたれに体を預けている。呑み過ぎだ。

「土生から出てるのは芸予汽船の今治便と……ん？」

スマホとにらめっこしていた釜田さんが喉の奥で怪訝な声を上げた。

「おい、土生商船の三原行きってのがあるぞ」

「三原？」

霧島さんがようやく釜田さんの手からスマホを取り返し、見る。

「本当だ、ありますね。調べてみましょうか」

時刻表を探す。少しして出てきた。

「乗るとしたら土生を13時59分に出港する高速船ですかね？ 今治からの船と同じ港ですし、乗り換える時間も15分くらいあります。これは三原に14時35分に着くみたいですけど」(図④参照)

「……ってことは、40分足らずで本州に渡れるんですか！」

ちよつと想定外の速さだ。

「こりゃあ、ひよつとしたら新幹線に間に合うかもしれないな。三原港から三原駅までどれくらいだ？」

お姉ちゃんが地図アプリで調べる。

「近いです！ 徒歩8分！」

「ってことは、土生で三原行きの船に乗り換えたなら余裕を持たしても三原駅には14時50分には到着しているってことか。どうだ、霧島？ 間に合いそうか？」

霧島さんが猛烈な勢いでスマホ画面をタップし、三原駅の時刻表を呼び出す。私達はそれをじりじりしながら見守る。

「あつた！」

霧島さんが快哉の声を上げた。

「三原駅15時ちょうど発、『こだま743号』！ これに乗れば広島と博多で乗り換えて『さくら417号』に乗れます！」

栗駒のアリバイが崩れた。(図⑥参照)

栗駒のアリバイトリック

出典：『JTB時刻表2014年1月号』（JTBパブリッシング）

18日	12:00	石鎚紡績本社会議終了	
	12:30	芸予汽船高速船に乗船	伯方島付近で安芸氏を殺害
	13:40	因島・土生港着	13:59発 土生商船高速船に乗り換え
	14:35	三原港着	徒歩で三原駅に移動（徒歩8分）
	15:00	三原発	山陽新幹線『こだま743号』に乗車
	15:22	広島着	15:31発『さくら559号』に乗換
	16:34	博多着	17:10発九州新幹線『さくら417号』に乗換
	18:33	川内着	18:48発『さくら561号』に乗換
	19:00	鹿児島中央着	19:15発日豊本線普通列車6960Mに乗換
	19:38	重富着	浜風邸に移動、浜風氏を殺害
	21:23	重富発	日豊本線普通列車6965Mに乗車
	21:42	鹿児島中央着	22:18発九州新幹線『さくら416号』に乗換
	23:55	博多着	
19日	8:45	福岡空港発	アイベックスエアラインズ81便に搭乘
	10:25	仙台空港着	12:00より商談

* *

今度こそ目を覚ますと、硬く、冷たい床の感触が鈍痛となつて全身に襲い掛かった。

呻きながらゆっくりと起き上がる。全身を覆う痛みは……ああ、そうだ。あの獣に貪婪に喰ひ散らかされたんだ。私は。

部屋は暗い。カーテンの隙間から、外の街灯の明かりが侵入している以外は、何も光っていない。

くしゃみが出て、寒気がした。頭痛がする。暖房もついていない部屋で私は全裸だった。ぼら撒かれた種は私の体表のあちこちでかびかびに凝固していた。口の中は血と種の後味が混じり合い、絶え間ない吐き気を催す。

何か着る物を。朦朧とする頭でそう考えながら、私は近くに落ちていた服に手を伸ばす。無理矢理剥ぎ取られた服はめちやめちやに破れていて、使い物にならなかった。服だった布地の合間から眼鏡が落ちた。装着する。しかし、視界ははつきりしなかった。

眼鏡のレンズにぼたり、ぼたりと熱い水滴が落ちる。どうして。

どうして、私がこんな目に。

仕方ないのだろう。

これは、私のせいだ。

涙を拭くのも億劫で、服を着るのも億劫で、私はそのまま座り込んだまままでいた。死にたかった。

このまま寒さにやられて、楽になりたかった。

生きる気力の喪失、それすらも通り越した死への渴望。

あの日と同じだった。

でも、その心に僅かに引っかけかりを覚えた。

そばにいて下さい！

聞き覚えのある声。

あの日以来、ずっと心の中で反響し続ける声。聞く度に安らぎを覚える、あの暖かな声。

誰の声だろうか？

その声の主を思い出し、私は戦慄した。

笠原はここを出る時に何を手にしていた？

笠原はここを出る時に誰の名を口にした？

鈍い軋みを発する脳細胞を動かす。それでも、答えに行きつくのに時間はかからなかった。

……まさか！

根拠もない。証拠もない。ただ予感だけが、論理もへつたくれもない予感だけが、私の最愛の人の危機を知らせていた。

あの獣の狙いに気付いた時、私の体がようやく息を吹き返した。痛みを堪えつつ、よろけるようにして立ち上がる。内腿を伝うあの獣の種の感触に、悪寒がする。

投げ捨てられたスマホを拾う。画面にヒビが入っている。電源を入れる。現れたのはホーム画面ではなく、今日は開いた覚えの無いあの人とのメッセージ画面だった。『今日は20時57分着の列車で戻ります。仕事が忙しいのでしばらく頑張つて』

時刻を見る。とうに21時を回っていた。もう一刻の猶予も無い。

かつてない速度で服を身に纏う。

ブーツを履くのは諦めて、普通の靴をつっかける。

玄関の戸を開け放つと、容赦なく冷気が襲い掛かる。

今行くわ、礼士さん！

私は夜に駆け出した。

*

*

お姉ちゃんは店の外で電話をかけている。事件のあらましを関係者に話しているのだろう。

「でも、あれですね。剣さん抜きでも私達だけで解けちゃいましたね」

「いいじゃねえか。今度剣が来たらあいつにも解かせてみようぜ」

霧島さんは『雪の茅舎』を飲み干し、帰り支度を始めた。お姉ちゃんとの打ち合わせも無事に済んだみたいだ。今夜は駅前ビジホに泊まるらしい。

「それにしても、結局先輩は来ませんでしたね」

「だな。全く、何やってんだか……」

釜田さんはぶつくとさ言いながら食器を下げる。今は21時を回った頃、まだまだ稼ぎ時だ。

「馳走様でした。良いお年を」

霧島さんは会計を済ませ、オールバックの頭を下げる。私はお釣りを渡した。

「毎度あり！ 来年もよろしくな」

「今年もありがとうございました、良いお年を！」

私は玄関まで見送ろうと、雪で凍てついた引き戸を開ける。

すると、予想だにしない光景がそこにあった。

疾走する女。

脇目も振らず、雪を蹴飛ばす。

真っ黒なショートヘアを吹雪になびかせる。

眼鏡の奥の吊り気味の目は、前方だけを見据えている。

「先輩!？」

ただならぬ予感がした。私は店を捨て、後を追った。

*

*

ぱつくりと裂かれた左頬から血が垂れる。暗い窓ガラスに映った傷を見ると、10センチ近くある傷から白い

皮下脂肪が顔を覗かせている。間一髪、動脈を斬られず
に済んだ。

声を出す間は無かった。男は二度、三度と刃物を突き
出してきた。僕は通路に転げ、必死に頭を回転させる。

逃げよう。逃げなければ、必死にデッキを駆ける。

しかし、遅かった。

『ドアが閉まります』

流れる自動音声。

響くドアエンジンの音。

閉ざされる外界との出口。

乗客の下車を確認した車掌が、ドアを閉めた。

逃げ場が無い。

追い詰められた。

男の駆ける足音が迫る。

少しでも時間を稼ぐべく、隣の車両に逃げる。

通路の自動ドアの開閉は緩慢で、僕は何度も体を激突

させた。時間をロスする度に、男の足音が迫って来る。

逃げながら考える。どうにかして男の動きを封じよう。

どうする？ どうする！？

視界の両脇を黄色い座席が流れる。正面には運転席へ

のドア。施錠されている。鍵を開けている時間は無い。

反対側の車両まで来てしまった。行き止まりだ！

座席に目をやる。座面を掴み、力を込めて取り外す。

小さいけど、多少は盾の代わりになるだろう。

とにかく列車の外に出ないと。頭に浮かんだのは非常

用ドアコックだった。コックを引けば、ドアのロックが

外れて外に出られる。でも、ドアコックはデッキにある。

そして、デッキに続く通路には男が立ちはだかっていた。

『どうしてこんな事をする！？』

喋ると頬に鋭い痛みが走る。とにかく時間を稼ぐ。

どうにかしてこの男を正面突破しないと殺される。手に
持つ座面に手汗が滲む。

「お前のせいだ。白雪が捕まったのは。お前が警察に突
き出した！」

白雪？ 聞き覚えのある名前だ。

「……小田原での殺人事件か！」

そうだ。白雪春江、釜田さんの元妻。彼女はあの事件

でアリバイを主張していた。トワイライトエクスプレス

に乗っていたというアリバイを僕が見破った。

脳内に記憶が蘇る。半年前、東京駅のステーションホ

テルで釜田さんが話していたこと。小田原の事件現場に

は白雪以外に何者かが侵入した痕跡があった。この男の

仕業か！ この男が共犯者か！ 証拠を消すためにでも

やったのだろう。いや、今はそんなことはどうでもいい。

「僕を殺したつてどうにもならないぞ！」

牽制しながら逃げ道を探す。無い。じゃあどうする。

とにかく男の刃物を使えなくさせよう。

力の限り大声を上げる。男が一瞬怯んだ。今だ！ 突

進する。男は刃物を突き出した。計画通り！

刃物が深々と盾に突き刺さり、僕の巨体が男の華奢な

体を押し倒した。

盾を奪う。

刃物が抜け、宙を舞う。

通路を走る。

デッキに出て、ドアコックが目につく。蓋を外し、引

く。非常ベルが鳴動し、ドアが解錠された。

背後に男が迫り、高々と刃物をかざした。僕はとっさ

にしゃがみ込む。顔の横に赤い物が来た。

ガキン、と金属同士がこすれ合う音がした。

僕は消火器を盾に、どうにか刃物を眼前で押しとどめ

た。

そして、その刃物がおかしいことに気付いた。

何の変哲もない包丁。でも、見覚えがある。

これは……まさか！？

恐怖が消え、僕の声に怒気が含まれた。

「瑞穂さんに何をした？」

男はねちやりとした笑みを見せた。

「あの人殺しか」

蔑みの視線が僕を穿つ。

「喰った」

* *

走る。

走る。

走る走る走る。

雪を蹴散らす。

吹雪を突つ切る。

建物の狭間に、見えた。

フェンスの向こうに、紅い新幹線が見えた。

あの列車だ。

あの列車に、礼士さんがいる！

そして……恐らく、あの男も。

改札を通る暇はない。

雪の積もったフェンスをよじ登る。

越える。

降りる。いや、落ちる。

雪から顔を上げ、また走り出す。

レールや砂利、枕木に足を取られながら線路を渡る。

ホームによじ登る。

いた！

目の前の列車の中で、獣と闘う礼士さんの姿が見えた。

その姿は、私を恐怖のどん底に陥れた。

このままでは！

このままでは！！

礼士さんが私と同じになってしまおう！！！！

疾走る。

車両のドアに飛びついた。

* * *

喰った……？

「お前、確氷の男だろ？ ただあの女を無理矢理やるだけじゃつまらない」

喰った……。

「お前は死ぬ。人殺しは何されたって文句を言えないだろ。男とくつついて幸せいっぱいなんて、そんな資格は無い」

喰った。

その意味を僕は分かりたくなかった。

でも、悟ってしまった。

初めて彼女を抱こうとした夜が蘇る。

傷だらけの彼女の姿が蘇る。

この男は！

この男が！！

瑞穂さんを！！！！

激情に我を忘れかけた。

でも。

彼女の笑顔。

彼女の気持ち。

それを裏切ることはいらない！

男はもう一度刃物を振りかざした。

僕は消火器のピンを抜き、レバーを引く。

白煙を撃つ。

煙幕を張る。

男の咳き込みが聞こえた。そこか！

消火器を振り下ろす。悲鳴と、確かな手応え。

辛うじて見える男の影を頼りに、急所は避け、ひたすらに腕を狙う。

消火器を振り下ろす。

消火器を振り下ろす。

消火器を振り下ろす。

悲鳴。

悲鳴。

手応え。

手応え。

手応え。

手応え。

手応え。

男は車内に逃げ、僕は追い詰める。形勢逆転。

煙が晴れる。

包丁の刃を叩き折る。

柄はまだ、男の手の中。

もう一発！

消火器を振り上げる。

そして。

「やめて……！！」

* * *

渾身の力を両腕に込める。

ドアが重く開いた。白い靄が流れ出す。

デッキに飛び込む。消火剤の匂いが鼻を突いた。

客室へ。

すると。

礼士さんの大きな背中が見えた。

消火器を振り上げ、振り下ろそうとしている背中が。

私は、疾走った。

愛する人を止めるために。

人殺しは、私だけでたくさんだ。

「やめて……！！」

礼士さんの前に回り込み、両手をかざす。

両手を痛みが襲い、私は礼士さんを止めた。

* * *

振り下ろす消火器を止めた人の姿を見て、僕は驚愕した。

「瑞穂さん……何でここに！？」

「あんた、何やってんのよ……！！」

恋人は僕の手から消火器を奪い、乱暴に投げ捨てる。

「今何をしようとした！？ 言え……！！」

青縁眼鏡の奥から、瑞穂さんの吊り目がキラキラと僕を睨みつける。

「あなたが人を殺してどうすんのよ……！！」

殺す？ 違う！

「あなたが私と同じになってどうするのよ……！！」

「瑞穂さん、誤解だ！ 僕はこの男を殺そうなんてしてない……！！」

僕は怒鳴り返し、瑞穂さんは沈黙した。

「……急所は外してある。刃物を奪おうとしたただけだ。

見て。腕以外には当てていない」

瑞穂さんは僕の言葉に振り返る。白い消火剤にまみれた獣がうずくまっていた。腕以外、傷一つついていない。

* * *

礼士さんの言葉に、私はへたり込みそうになった。

どうにか体を支えながら獣に向かい合う。

「あんた、やったわね」

獣の濁った目が私を見る。

「私だけならまだしも、この人に手を出したことは許さない」

そこまです。そこまです。

無理がたたった私の体は、自分の体重を支えきれなくなった。

床が目の前に来て、視覚が横倒しになりかける。

「瑞穂さん！」

恋人が私の体を支え、抱き上げる。

「もう大丈夫だよ」

私をなだめるように、いつもの優しい声をかける。

「行こうか」

お姫様抱っこのまま、通路を連れられる。

私には後ろが見えた。

折れた刃を握り、立ち上がり、迫り来る笠原の姿が見えた。

私には叫ぶことしかできなかった。

礼士さんの背中に刃が突き立てられ、斬られた。

鮮血が噴いた。

最愛の人の口から短い叫びが漏れ、私ごと倒れた。

* * *

容赦なく血の海が広がる。

礼士さんはびくりともせず、その体を血の海に浸していく。

笠原はわざと背中への傷を踏みつけて、私の眼前に立つ。

私の顔を足蹴にする。眼鏡が吹っ飛び、砕けた。額が割れ、血が流れた。

獣は私に手を伸ばし、掴み上げる。

あんなに殴られた両腕のどこにこんな力が込められるのだろうか。

直に刃を握った手には、血がぬらぬらと滲んでいる。

その汚らしい手で私の首を掴み、壁に打ち付ける。視界に星が舞った。

気道が塞がれ、息が詰まる。

「何でこんなことをした？」

笠原は満面の笑みを浮かべた。

「何で運転士を殺した？」

獣の背後で、礼士さんの命の灯が消えていく。

「お前が運転士を殺した」

違う！！！！

「お前が殺したんだよ、井上を殺したようになあ！！！！」

全身の血液が沸騰した。

睨む。

せめてこの獣を焼き尽くそうと、瞳孔を見開く。

それを見て、笠原はケタケタと嘲笑った。

「そうそう、その顔だよ。やっぱり面白いな、お前」

面白い？

「何か言ってみろよ、このクズ」

そうだった。

あの日々の中で、何度も何度も

『お前、面白いな』

『面白いな』

私は、玩具だった。

「お前が俺にしたように、お前から奪ってやったぞ！」

濁った瞳に狂喜が広がる。

「お前は俺と井上にわざわざ遊んでもらったんだ、大人しく遊ばれていればよかったんだよ」

濁った瞳に狂気が広がる。

「死ぬ」

獣はそう言い放ち、抵抗できない私の口に舌をねじ込んできた。

最低の獣。

最愛の人。

舌が、記憶が、捻じ曲がる。

殺される。

死ぬのか。

私は、死ぬのか。

不幸なまま。

この獣の玩具のまま。

呼吸ができない。

視界がまた暗くなる。

もう、おしまいなのか。

せめて、最期に一度。

もう一度、礼士さんと笑い合いたかった。

愛してらって、そう言いたかった。

あの人と一緒に、生きたかった。

……。

……。

……。

笑い合いたいの？

だったら、笑い合えばいい。

愛したいの？

だったら、愛すればいい。

生きたいの？

だったら、生きればいい。

私は、どうしたいの？

私は。

私は。

私は、礼士さんを助けたい！！！！

視界が暗黒から純白へ明ける。

沈みかけた意識が反転し、火が点く。

獣の舌。

私は、あらんかぎりの力でそれに歯を突き立てた。

口の中で血の味が爆ぜ、肉塊をちぎる。

獣の声帯が割け、口が離れる。手が緩む。

穢らわしい肉塊を、血を、獣の顔めがけて吐きつける。

そして、私は暴れた。

全身の筋肉が覚醒した。

理性が吹っ飛んだ。

吼えた。

もはや獣は眼中に無かった。

意識の全てを、肉体の全てを、私の全てを礼士さんに集積させる。

それに身を任せ、吼え続けた。暴れ続けた。

力任せに咆哮び、そして。

私の両腕が、笠原の顔を鷲掴みにした。

皮膚に、目玉に、私の指という指が喰い込み、流血させ、抉り、削る。

そしてそのまま、真横になぎ倒した。

獣は肘掛けに後頭部を強打し、床に崩れた。

獣の叫びが消えた。

私は振り返らず、礼士さんに駆け寄った。

* *

呼吸が追いつかずに脇腹が焼けるように痛い。

先輩は何をもち狂ったのか、フェンスを飛び越えて行ってしまった。さすがにあそこまでは追いかけられなかった私は駅舎二階の改札に回った。駅員を引き連れて新幹線ホームに駆け降りた。

駅員は目敏かった。

「おかしい、何であそこだけドアが開いているんだ？」

ホームに停まる新幹線。

一か所だけ開けっ放しのドア。

轟く慟哭。

私は息を切らしつつ、そこをめがけて走った。

駅員の制止も聞かず、車内に入る。

すると。

そこには先輩がいた。

刃さんがいた。

二人とも血まみれだった。

「救急車を！！！」

先輩が怒鳴った。

* *

「礼士さん！！！」

私は恋人の名を叫んだ。

「死なないで！！！」

叫べば、まだ呼び戻せるはず。

「生きて！！！」

そう願いながら。

「私を置いていかないで！！！」

もう助からない。

「私のそばにいて！！！」

その不安を必死に押し殺しながら。

礼士さんは僅かに動き、うつすらと目を開けた。

「瑞……穂……さん……」

か細い声。私は耳をそばだてる。

私の破れそうな鼓動。鳴り続ける非常ベル。

それすらも静寂に変えて、礼士さんの言葉は私に響いた。

「逃……げ……ろ……」

意識の喪失。

私は狂いかけた。

でも、錯乱する意識のどこかで、私の心は変質した。

私は私を信じるしかない。

この人を救うために。

泣き叫びながら。

泣き叫びながらも、私は礼士さんの巨体に肩を回す。

覚醒した私の筋肉は従順に礼士さんを持ち上げ、私は歩み始めた。

私が！

私が礼士さんを助ける！！

絶対に！！！！

「救急車を！！！」

目の前に駆け付けた人影に懇願する。

「礼士さん！！！」

意識を失った最愛の人に呼びかける。

「あなたがいるから、私は生きる！！！」

魂の叫びよ、どうか。

「だから、死なないで！！！」

届け。

〈第八話につづく〉

*次回作へはお乗り換えです。このままページをめくってお進み下さい。